

5 言葉の意味がわからなくても、ちつとも気になりました。

写

おばあちゃんが、「ちようちんぶらぶら、お先に帰りましょ」などと、調子のよい歌を歌いながら、「ほい」「ほい」と手を叩くのに合わせて、私が「^{注3}嬉々として踊っているのを、父と母は「しようがないなあ」と笑いながら見ていたそうです。子どもって、言葉の響きだけで、身体が反応してしまうものですよ。

「ちんぷいぷい」じゃないけれど、おばあちゃんは、そういう ⁶おまじないみたいな、「言葉を、いくつも知っていました。」

のどに魚の小骨がつかえたとき、食べかけの魚を頭の上に乗せられたことがありました。おばあちゃんが、その魚の上に手を置いて、「うむっ」と気合をいれたら、ふっと小骨が抜けて、びっくりしたことがあります。おばあちゃんいわく、「魚が自分の小骨を引っ張るんだよ」って。不思議ですよ。

私は、そんなおばあちゃんのことを大好きでした。

《文章Ⅱ》

はじめてオーストラリアに行ってから二十年あまり、作家になってからも、私は、毎年 ^{注3}フィールドワークのためにオーストラリアに通いつづけてきました。

念願の作家になることができたときに、たとえ食べられなくても（デビューしてすぐ食べられるなんて、そんなすごい作家ではありませんでしたから）、アルバイトをしながら作家に **センネン** するという選択肢がなかったわけではありません。それでも文化人類学者と ⁷二足のわらじを履きつづけてきたのは、^{注4}靴ふきマットの上から飛びだした遠いあの日から、**生身**の人間と出会い、異文化の中でもまれるフィールドワークの奥深い魅力に、魅せられてしまったからだと思います。

痛い思いをするのは本当に嫌です。でも、そうして自分の足で歩いているなかで、肌感覚で実感できたことがたくさんあって、私の書く物語のあちらこちらに、それは確かに息づいているような気がするのです。

頭でわかつたつもりになっていることと実際の経験のあいだには、大きな開きがあるもので、中学生のころ、漫画では斧を振りまわす男を描いたりしていたのに、実際にオーストラリアで ^{注5}アボリジニに本物の斧を渡されたら、どうしていいのかわかりませんでした。

力まかせに振り下ろしたら、木の根にガイーンとはじかれて、手がびりびり。

たき火用に木の根っこを採ってこないといけないのに、そんなこともできなくて「なにやってんだ、ナホコ、おまえ、斧の使いかたが間違っているよ」と笑われました。

木を伐るわけじゃないんだから、斧をさかさまにして柄のほうで、根っこを叩いて掘り起こせよ、と言われて、そんな使いかたもあるのだとはじめて知ったのでした。そういうことも、実際に教わらないとわからないものですよね。

長いキャンプ生活の中で、たき火をおこすと、どんなふうに燃えるのかを知ることができました。

たき火の火は、日の光がまだあるうちには見えないこと、たき火の火が見えはじめることによって、いつの間にか、辺りが暗くなってきたり、と、気づく。たき火の匂いは、服にしみいたら、洗ったくらいじゃ落ちないこと。

⁸身をもつて知ったそういうひとつひとつの体験が、全部、あとになって物語の中で、息を吹き返し、かたちになっていきました。

馬が好きで、大学生のときには、短いあいですが、乗馬同好会に入っていたこともあります。

オーストラリアで ^{注6}ブッシュバイクをしたときは、さすがにへろへろになりましたが、実際に乗ったことがなければ、長いあいだ乗っているとどこがこすれるのか、降りたときに、どこが痛くなるのかもわからないでしょう。

けっこうイジワルな馬もいて、落馬したら、おまえ、なに落ちてんだよ、とあざわらうように、ポロシヤツの襟のあたりをかまれて持ちあげられたこともあります。白いポロシヤツだったので、見事に草色の齒形がついていて、びっくりしました。

そうした体験が、^{注7}バルサとチャグムが馬で山道を登っていくシーンを描こうとしたときに、ひよいと出てきたりするのです。

馬の脇腹をそつと踵で押して歩かせはじめたバルサは、背後にいるチャグムが、なんともいぬ顔で自分を見ているのに、気づかなかった。

〈タンダ〉も、〈名無し〉もおとなしい馬で、険しい山道も、白く息を吐きながら、どんなのぼった。斜面をのぼっていく馬に乗っていると、足だけでなく、腰や背にも負担がかかる。日が暮れて馬をおりるころには、いつも、チャグムはくたくたになっていた。地面におりても、膝がわらわらして、まともに立てないほどだった。

——『天と地の守り人 第二部（偕成社）』

つらいことに出会ったときは「いずれ作家としてこの経験が役に立つ」——いつも、そう思っていました。

⁹作家の性というのは、妙にしたたかなもので、愛犬が死んだときも、悲しくて悲しくて涙がとまらないのに、その悲しみを後ろから傍観者のように見ている自分がいたりするのです。

この悲しみは、いつたい、どういう悲しみだろう。

愛犬は、いま、どんな匂いがしている？ 周りの人はどうしてる？

デッサンをするように記憶に留めておこうとしている、とてもとても冷静な傍観者の自分がいるのです。自分がどうにかなくなってしまったんじゃないかと思うような、身も心も吹っ飛ぶような恋をしているときも、その自分を外側から見ている自分がいるのです。

しんどいことがあったとき、この感覚が、意外に役に立ったこともありました。

アボリジニとの人間関係に ^{注8}翻弄されて、ああ、疲れたな、と思

写

つても、子どものころ、洞窟どうくつで考古学者になりきっていたみたいに「お
 いおい、アポリジニとの人間関係で悩なやんでいるなんて、おまえ、いつぱ
 しの文化人類学者みたいじゃんよ」と自分を笑えば、なんとか乗りきる
 ことができました。

もう逃げたいな、と思うたびに、「なりたい自分」の姿を思ってみることで、なんとかやってきたような気がします。

つらいとき、自分の外側に出て、「人生という物語」の中を、いま生き
ている自分を見る。そうしていると、10 つらい、悲しいことだけじゃな
いな、「 」もあるよな、と気づいたりする。

小さくとも喜びがなかったら、苦しみや悲しみを越えていくことは、なかなかできないでしょう。たぶん、私は、そうやって、なんとか、やりはじめたことをあきらめずに歩いてきたのです。

子どものころ、時を忘れて物語にのめりこんだように、私はいまも、物語を生きるように、自分の人生を生きているような気がします。

まず夢を見る。それを頭の中で描いてみる。でも現実が「違うよ」と教えてくれる、その瞬間、パツと何かをつかまえる。

そうやって自分が【注9】享きようじゆ受した体験を、特別なものとして刈かりとつては、物語に生かしてきたのだと思います。

パン生地も焼くまえに、よく発酵はっこうさせるとふくらむものですが、私も、すでにエピソードになっているような思い出をよく人に話します。

繰り返して話すうちに、相手の反応を見ながら、ちよつとずつ足したり、ひいたりして修正するので、だんだんエピソードが**センレン**されて、その話のおもしろさの勘どころがわかってきます。これはまるで……そう、11 私のおばあちゃんみたいです。

おばあちゃんも、私にたくさんのお話をしながら、似たようなことをやっていったのに違いありません。

経験は大切です。でも、べつに、人と違うことをたくさんしなければいけないということではなくて、むしろ、人と同じことをしていながら、そこに人とは違うものを感じ取ることのほうが大切だと思います。

優れた描写力で、読む者を、遠い時代のその場所へと連れていってくれる【注10】サトクリフにしても、行きたい場所に行きたいように行けたわけではありませんでした。

子どものころの病気が原因で、彼女が身体が不自由だったと知ったとき、どんなに驚き、また励まされたことでしょう。

サトクリフは、限られた環境かんきょうのなかで、自分の目でしかと見たものを土台にして、そこから想像力をふくらませていたのです。12 足りないものが反転して、その人の力になる。なるほど、幼いころ、偉人伝で学んだ13 極意ごくいは、まったくそのとおりでした。

物語を書きたいなら、まず、どんなことでもいいから、興味があるものを、どれだけ広げられるか（あるいは掘りさげられるか）を考えてみる。

てください。

そして、そのことについて（まずはどんなに長くなってもいいから）最初から最後まで書きおえてみてください。

最初は14回承継を見つけることさえ大変だと思います。でもプロの作家は、そこにありきたりじゃない、自分だけの道筋を必ず見つけたものです。

15 それがあるかどうかは、自分で自分が書いた物語を直してみればわかります。

私は、まえの晩に書いたものを、毎朝、直しています。
一日の作業としては、朝書いて、夜に書きはじめるとき、また読み直して、直す。

〔注11〕のりしろじゃないけど、そうやって書いたところを繰り返し直している、そこからまた新しい芽が出てきます。そして翌日になると、その新しいところをまた直すと、そこから新しい芽がまた出てくるので、それをまた直す……というのを繰り返しているのです。

そうすると、あるとき、登場人物が何かを言ったのがきっかけで、次の展開が開けたりする。その物語を生きている人間たちが、その物語のあるべき姿を生みだしていった、頭の中で最初に想定していたかたちじやないところに、連れていってくれるのです。

16 だから私は、直すことが嫌いではありません。
毎朝、毎晩、何度も、何度も、繰り返し直してい

その作業は、考古学者が埋もれていた化石を見つけだすことに似ているかもしれません。

たったひとつのシーンに、じつは多くのものが眠っているからです。そこにいる女の子の表情、着ているもの、窓から差しこんでくる光……生まれ落ちようとする世界がそこにすでにあるのです。それが見えるかどうか、物語が書けるかどうか、かかっているのだと思います。

近ごろ、学生さんと話していて、
17 「一言主」が増えたなあと
思うことがあります。

何か問いかけても、返ってくる言葉が、すごく短いんです。「おもしろかった」「フツー」「ヤバくない?」

そのひと言じゃ伝わらないたくさんものを、本当は後ろにいつぱい抱かえているだろうに、なぜ、ひと言なんだろう？ 面倒めんどうなのかな、それとも、ひと言だけ発して、反応を見ているのかな、などと、考えてしまうう。

「どんな気持ちがしますか」と聞かれて「悲しい」と答えたときに、たぶん誰もが「でも、そのひと言ではやっぱり伝えられないな」と思うはずです。

「悲しい」のひとつですませたけれど、その後ろに、うまく言えなかったものや、やったものが本当はいっぱいあって、その捨てちゃったものが全部集まらないと、本当は、自分が言った「悲しい」という意味にはな



らないんだけどな……そう思っている気がするのです。

物語を書くことは、そのひと言では言えなかったこと、うまく言葉にできなくて、捨ててしまったことを、全部、ひとつひとつ拾い集めて、本当に伝えたかったのはこういうことなのだと、伝えることなのだと思います。

物語にしないと、とても伝えきれないものを、人は、それぞれに抱えている。

だからこそ、神話のむかしからたぐさんの物語が語られてきたのだと思うのです。

上橋菜穂子著（構成・文 瀧晴巳）『物語ること、生きること』

【注】

- 1 落人 Ⅱ 戦いに負けて、追ってくる敵から逃げる人。
- 2 嬉々として Ⅱ とてもうれしそうに
- 3 フィールドワーク Ⅱ 文化人類学者が実際にその場所に行つて、調査や研究・採集などを行うこと。
- 4 靴ふきマットの上から飛びだした Ⅱ イギリスの作家トールキン『ホビットの冒険』の登場人物ビルボにちなむ。ビルボは面倒くさがりで新しいこと、こわいこともできることならしたくないのに「靴ふきマットの上で、もそもそしているヤツと思われたくない!」と思い、長い冒険の旅にでた。それに影響を受けて、筆者の上橋菜穂子が思い切つて行動したことを指す。
- 5 アボリジニ Ⅱ オーストラリア大陸に昔から住んでいる民族。
- 6 ブッシュハイク Ⅱ ハイキングのこと。
- 7 バルサとチャグム Ⅱ 上橋菜穂子『天と地の守り人』の登場人物。
- 8 翻弄されて Ⅱ 振り回されて
- 9 享受した Ⅱ 味わった
- 10 サトクリフ Ⅱ イギリスの小説家。
- 11 のりしろ Ⅱ 余裕や遊びの部分。

問一 本文中の太字のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問二 1 加減 と同じ成り立ちの熟語を次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 国立 イ 価値 ウ 利害 エ 作文

問三 へ へにもっともよくあてはまる言葉を次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア じりじりと イ まじまじと ウ たんたんと エ まざまざと

問四 2 おばあちゃんはものすごく話のうまい人で とありますが、おばあちゃんの話のうまさにあてはまらないものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 擬音語をうまく使って聞き手をひきつけるところ。 イ 聞き手の反応を見ながらどんどん内容を変えるところ。

ウ どんな話でも聞き手をわくわくさせる結末になるところ。 エ 実際に起こった出来事のように聞き手に感じさせるところ。

問五 3 おばあちゃんの十八番 とはここではどういう意味ですか。もっともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自慢話 イ お気に入り ウ 宝物 エ 得意芸

問六 4 たぐさんの「 」がいないているの「 」にあてはまる言葉を漢字一字で答えなさい。

問七 5 言葉の意味がわからなくても、ちつとも気になりませんでした とありますが、気にならなかったのはなぜですか。もっともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「ほとほと、ほとほと」という言葉の響きはいつも聞きなれている音だから。

イ 「ちゃりちゃり」という表現で「鎧金具」を想像することができたから。

ウ 「落人」は家族でよく見ていた時代物のドラマで登場する存在だったから。

エ 「うむっ」と気合を入れるおばあちゃんの言葉には不思議な力があるから。



問八 6 おまじないみたいな、「」言葉、いくつも知っていましたの「」にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 調子がよくておもしろい イ 願いごとをかなえてくれる ウ 落語に出てくる長い エ 子どもには覚えられない

問九 7 二足のわらじを履きつづけてきた とありますが、「二足のわらじを履く」とはここではどういうことですか。説明しなさい。

問十 8 身をもつて知ったそういうひとつひとつの体験が、全部、あとになって物語の中で、息を吹き返し、かたちになっていきました とありますが、「ひとつひとつの体験が」「かたちに」なるとはどういうことですか。もっともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 子どものころ病院通いをしたつらい経験が、大人になって「人生という物語」を生きる強さにつながった。
 イ 中学生のころ漫画で斧を振り回す男を描いた経験が、斧のさまざまな使い方を身につけることにつながった。
 ウ 実際にオーストラリアで馬に乗った経験が、チャグムが馬に乗ってへとへとになった様子につながった。
 エ 愛犬が死んだときの悲しくて悲しくて涙が止まらない経験が、デッサンのように正確な記憶につながった。

問十一 9 作家の性というのは、妙にしたたかなもので とありますが、

(1) 「したたかな」のここでの意味にもっともよくあてはまることわざを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア かわいい子には旅をさせよ イ 転んでもただでは起きぬ ウ 情けは人のためならず エ のど元過ぎれば熱さを忘れる

(2) 「作家の性」が「妙にしたたかなもの」だというのはなぜですか。もっともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア どんな体験も作品に生かそうとしてしまうから。 イ 簡単なこともあえて難しく表現してしまうから。
 ウ 悲しい時も心が動かず平気な顔をしてしまうから。 エ いつでも他人の本心を深く考え疑ってしまうから。

問十二 10 つらい、悲しいことだけじゃないな、「」もあるよな、と気づいたりするの「」にあてはまる言葉を本文中から二字でぬき出して答えなさい。

問十三 11 私のおばあちゃんみたいです とありますが、私の話し方のどのようなところが「おばあちゃんみたい」のですか。《文章I》からおばあちゃんの話し方について書いてある一文をさがし、はじめの五字を答えなさい。

問十四 12 足りないものが反転して、その人の力になる とありますが、サトクリフの場合はどうだったのですか。説明しなさい。

問十五 13 極意 の意味としてもっともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 特に秘密にすること イ もっとも気を付けること ウ いちばん大切なこと エ とても役に立つこと

問十六 14 ☐承 ☒結 の ☐と ☒にあてはまる漢字一字をそれぞれ解答らんにあてはまるように答えなさい。

問十七 15 それ とは何ですか。本文中から十五字程度でぬき出しなさい。

問十八 16 だから私は、直すことが嫌いではありません。とありますが、なぜですか。もつともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア くりかえし直すことで物語の次の展開が広がっていくから。 イ くりかえし直すことで自分の体験を人に伝えやすくなるから。
ウ くりかえし直すことで苦しみをやわらげることが出来るから。 エ くりかえし直すことでみんなに受け入れられる物語になるから。

問十九 17 「一言主」 とありますが、

(1) 筆者はどういう人のことだと考えていますか。本文中の言葉を使って説明しなさい。

(2) 「一言主」のことを筆者はどのように考えていますか。もつともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 矛盾を感じている。 イ 疑問に思っている。 ウ 仕方ないとあきらめている。 エ 嫌悪感を抱いている。

(3) 「一言主」になってしまった場合の具体例を、本文の内容をふまえて自分で考えて書きなさい。自分の体験したことでも構いません。このとき「おもしろい」「フツー」「ヤバイ」「悲しい」以外で書きなさい。

問二十 次のア～キのうち、《文章Ⅱ》の内容と合っているものを二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 筆者は肌感覚で実感したことを書くのでなければ、すぐれた物語はできないと考えている。
イ 筆者はつらい時にはその経験を十分に味わうことで、よりよい人生になると考えている。
ウ 筆者は夢の中から得た真実を自分の人生の物語に生かすことができると言っている。
エ 筆者はおもしろい物語を作るためには、人とは違う経験をすることが必要だと考えている。
オ 筆者は物語を考える時は見たものを土台として広く深く考えることが大切だと言っている。
カ 筆者は学生の表現力が乏しいので、物語を通して表現力を豊かにすべきだと言っている。
キ 筆者は誰もが抱えるうまく表現できないことを人に伝えたくて物語るのだと考えている。

ザッオン

口頭伝承

ウラテ

問一

声色

センネン

生身

センレン

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

問十

問十一
(1)

(2)

問十二

問十三

問十四

問十五

問十六

承

結

問十七

15

問十八

問十九

(1)

(2)

(3) 答えは 国語一六 の解答らんに書きなさい。

問二十